

前置詞 *de* に導かれる国名女性単数名詞 における定冠詞の有無について

——*de France* と *de la France* を中心に——

谷 口 千賀子

0. はじめに

フランス語の *de* は、前置詞の中で使用頻度が高く、意味内容がもっとも希薄だと言われることがある⁽¹⁾。

この前置詞 *de* につづく子音始まりの国名女性単数名詞（以下、女性国名）は、定冠詞 *la* を伴うことも伴わないこともある。

(01) *La capitale de la France.* / *L'est de la France.*

(02) *Je viens de France.* / *L'ambassade de France.*

これに対して前置詞 *de* が子音始まりの国名男性単数名詞や国名複数名詞を導く際には常に定冠詞 *le, les* が前置詞 *de* に組み込まれた縮約が起こる。

(03) *La capitale du Japon.* / *L'est des États-Unis.*

(04) *Je viens du Japon.* / *L'ambassade des États-Unis.*

ところで(02)と(04)の間に見られるような対立が問題となるのは子音始まりの単数国名の場合に限られる。なぜなら母音始まりの国名（以下、母音国名）の場合は、女性名詞（*Italie*）も男性名詞（*Irak*）も冠詞に関して違いが認められず、いずれも定冠詞 *l'* を伴うことも伴わないこともあるからである。

(05) *La capitale de l'Italie.* / *Je viens d'Italie.*

(06) *La capitale de l'Irak.* / *Je viens d'Irak.*

したがって、「前置詞 *de* + 国名」形式における定冠詞の有無の問題は女性国名および母音国名に特有の現象であると考えられる。

Grevisse (1988) では、大陸や国などを表す女性名詞および母音始まりの名詞の前に「起源 *origine*」を示す前置詞が用いられるとき、それらの名詞はしばしば冠詞を伴わないと記されている (§571, b)-3^o) が、用例を観察すると前置詞 *de* が *origine* を表していると思われる文脈で女性国名が定冠詞を伴う例も見られる。

(07) On ne sait de quoi il vit. D'une bourse, sans aucun doute, mais vient-elle *de la France* ou de Cuba^{(2)?} (PERRUT, D. 2009, *Patria o muerte*)

本稿では特に、France の 1300 余りの用例⁽³⁾の観察をとおして、前置詞 *de* に導かれる女性国名および母音国名の定冠詞の有無にかかわる要因を明らかにすることを目指す。

「前置詞 *de*+N」の形式は動詞、名詞、形容詞などさまざまな語句に対してなんらかの関係において N を提示する。以下では、*de France* (以下、*de F*) と *de la France* (以下、*de la F*) がそれぞれ、動詞によって表される事行と関係のあることを示す場合 (1 章)、前置される名詞と関係のあることを示す場合 (2 章)、そしてその他の要素と関係のあることを示す場合 (3 章) を観察し、最後に同じ女性国名・母音国名であっても *France* とは異なるふるまいをする場合のあることを指摘する (4 章)。

1. 動詞 V + *de F* / *de la F*

1.1. 「出所」「起点」「起源」などを表す状況補語として用いられるとき

我々のコーパスによれば、*de F* は自動詞とともに用いられる場合にも、他動詞とともに用いられる場合にも常に「出所」「起点」「起源」などを表す状況補語とみなされる。

(08) Sandro était rentré cet été *de France* si maigre que personne ne réussissait à le reconnaître.

(POUQUET, J. 2006, *Journal sous l'Occupation en Périgord : 1942-1945*)

(09) Il a apporté *de France* des peintures, des dessins, des étoffes, [...].

(HOPPENOT, H. 2012, *Journal 1918-1933*)

さらに de F が「概念的起点」として用いられていると思われる例も見られる。

- (10) *Vu de France, cette année-là, l'Univers entier apparaissait minable ; intrinsèquement.*
(JENNI, A. 2011, *L'Art français de la guerre*)

前置詞 de は「起源 origine」や「隔たり éloignement」を表すラテン語の前置詞 de に由来し⁽⁴⁾、また *Le Trésor de la Langue Française* で「起点 point de départ」が前置詞 de の第一義とされていることから、この用法が前置詞 de の最も基本的な用法のひとつであろうと考えられる。

ところで de F が主に動詞 venir とともに用いられて「出所」「起点」「起源」などの関係を表す例は非常に頻繁に見られる。

- (11) *Je viens de France.*

この例では「フランス出身である」または「フランスからやってくる」というふたつの解釈が可能である。いずれの場合も前置詞 de は単に「私」の「出所」が「フランス」であるという関係を示している。しかしながら「フランスからやってくる」という解釈の際には de la F を用いて、

- (12) *Je viens de la France.*

とも表すことができるようである。これは「フランス」を国境で区切られた限定された土地という、より具体的な対象物として見ているからであると考えられる。

このように具体的に実体を想定できる場合には「出所」「起点」「起源」などの関係を示す場合にも de la F が用いられる。たとえば France になんらかの属性が付与される場合には常に de la F となる。これは属性が付与されることによって、ある側面をもつ「フランス」としての実体を想定するからである。

- (13) *Philippe l'intellectuel part à vingt-cinq ans pour l'univers le moins fait pour lui, avec des bidasses de sept ans ses cadets issus de la France profonde.*

(ARNAUD, C. 2010, *Qu'as-tu fait de tes frères?*)

ところで上の例 (07) でも前置詞 de は「フランス」が「奨学金」の「出

所」であるという関係を示しているが、de F ではなく de la F の形式が用いられている。これはもちろん「フランス」を国境で区切られた限定された土地と捉えているからでもなければ、なんらかの属性を付与された「フランス」であるからというわけでもない。ここでの「フランス」は「出所」「起点」「起源」などとみなされる単なる場所というよりは、「奨学金が出る」という事態に積極的にかかわる主体である。つまり、「フランス」は単なる場所を示すだけでなく奨学金を与える機関としてその実体が捉えられ、そのために de la F の形式が用いられているのである⁽⁵⁾。

1.2. 他動詞の間接補語として用いられるとき

コーパスを観察すると、前置詞 de が他動詞の間接目的補語を導く場合には常に de la F が用いられている。

(14) Calmement, en orateur parfait, il nous a parlé *de la France*, [...].

(TORRÈS, T. 2000, *Une Française libre : journal 1939-1945*)

(15) Elle ne se moque ni *de la France*, ni de la Hollande, [...].

(DESPLÉCHIN, M. 2006, *L'Album vert*)

文の構成素のひとつとして発話の場に導入される要素は、慣用表現などの場合を除き、常に実体の捉えられる対象でなければならない。したがって、France が他動詞の間接補語として発話の場に導入される際にも常に実体が想定されていることを示す de la F の形式が採用されることとなる。

2. 名詞（句）N + de F / de la F

一般に N 1 de N 2 形式においては、N 2 が N 1 の属性を表す（形容詞的）場合には限定辞が省略され（la clé *de voiture*）、N 2 が具体的な指示対象を想起させる場合には限定辞が添えられる（la clé *de la voiture*）と説明されることが多い。N de F, N de la F の場合にもこの捉え方で説明でき、そこからさまざまな意味効果が生まれる。

2.1. N de F

2.1.1. N の存在場所を表すとき

de + 無冠詞名詞はしばしばその名詞に対応する形容詞と同等の機能を有するとされるが、以下のように de F = français と解釈できるような例が多く見られる。

- (16) Nous subîmes un procès en règle, semblable à ceux qui se déroulèrent à Paris et dans d'autres villes *de France*. (villes *de France* = villes *françaises*) (BRIÈRE- BLANCHET, C. 2009, *Voyage au bout de la révolution : de Pékin à Sochaux*)

- (17) Je propose une révolution pour toutes les femmes *de France*. (femmes *de France* = femmes *françaises*) (Le Monde, le 04. 05. 2007)

一方、次の(18)では de F は“les Français”の存在する場所としか解釈できない。

- (18) Pendant cinq minutes, tous les Français *de France*, et ceux d'Angleterre, d'Afrique, d'Amérique, [...] s'arrêteront à la place où ils seront et, [...]. (TORRÈS, T. 2000, *Une Française libre : journal 1939-1945*)

また次の例についても、「フランス人」という属性を表しているというよりは、文脈から「フランス」という場所を表していると解釈するほうが妥当であるように思われる。

- (19) Aux murs, des dessins de papa, sur la cheminée des photos de nos amis *de France*. Comme tout est calme ! Mrs. Porte, la housekeeper, nous apporte le breakfast sur un plateau. (ibid.)

- (20) [...] à la fin des années cinquante, un ouvrier *de France* gagne plus qu'un ouvrier d'Italie. (STORTI, M. 2008, *L'arrivée de mon père en France*)

(19) ではイギリスにいる“nous”が「フランスにいる」友人の写真を飾っている、そして(20)では国籍による賃金格差と解釈するよりは「フランスにいる」労働者と「イタリアにいる」労働者の賃金の差に言及していると読み取ることができる。

de F を用いる際には、前置される名詞 N と France との間になんらかの関係があることが示されるわけであるが、France に対応する形容詞 français が存在するにもかかわらず de F の形式を用いることで、「フランス」という場所を特に想起させやすいことがうかがえる⁽⁶⁾。

ところで、1.1. でも見たように、France になんらかの属性が付与される場合にはやはり常に de la F となる。属性が付与されることによって、ある側面をもつ「フランス」としての実体を想定できるからである。

- (21) Ce que veut dire Éon, [...] c'est que, depuis des mois, des hommes de la France libre mènent une lutte sourde contre notre chef, [...].

(TORRÈS, T. 2000, *Une Française libre : journal 1939-1945*)

また、なんらかの属性が付与されていなくても、「フランス」の実体が捉えられるときには de la F の形式が採用される。たとえば (19) と同様に前置詞 de に先行する語が“ami”であっても、de la F と結びつく際にはもはや「フランスにいる」友人という解釈はできない。

- (22) Déjeuner chez les Roland de Margerie. Ils veulent nous faire rencontrer «des amis de la France». Mais tous les Allemands sont, à présent, des amis de la France [...]. (HOPPENOT, H. 2012, *Journal 1918-1933 : Rio de Janeiro, Téhéran, Santiago du Chili, Rio de Janeiro, Berlin, Beyrouth-Damas, Berne*)

この例では前置詞 de によって“amis”と実体としての「フランス」つまり「フランス国家」との関係が示され、「フランス国家」としての友人と解釈される。この実体としての「フランス」は「国」そのものだけでなく「フランスチーム」など別の指示対象を比喩的に示す場合もある。

- (23) Il y a des jours qui ne s'oublient pas. Une naissance, un décès, bien sûr ; mais aussi [...] l'assassinat de Kennedy, la victoire de la France à la Coupe du monde de football ... (Le Monde, le 04. 05. 2007)

2.1.2. N を固有名詞的に解釈させる要素として用いられるとき

使用例を観察すると、N に *de F* が付与されることによって、N *de F* 全体で固有名詞とみなされるものや、固有名詞的に捉えられるものが非常に多く見られる。

- － 公的施設：la Bibliothèque Nationale *de France*, le Stade *de France*, l'ambassade *de France*, la Banque *de France*
- － 組織：Gaz *de France*, Électricité *de France*
- － スポーツ大会：le Tour *de France*, la Coupe *de France*, le Championnat *de France*
- － 雑誌や出版社：Jours *de France*, la Revue *de France*, les Presses universitaires *de France*
- － 歴史的出来事：la Révolution *de France*, la Bataille *de France*
- － 商業施設：Café *de France*, Hôtel *de France*
- － 通りや地名：rue *de France*, avenue *de France*, Fort *de France*

その他、*de F* と結びつくことによって固有名詞的に特定の指示対象を想起させるものとしては、le champion *de France*, le consul *de France* といった身分、les trois couleurs *de France* や la terre *de France*, le pays *de France*⁽⁷⁾ などがある。

前置詞 *de* を介して N に「フランス」というラベルを貼ることで、国を代表するものという意味価値が加わると考えられる。したがって商業施設名や社名などに *de F* の形式が用いられて、あたかもフランスを代表するような商業施設や会社であるかのようなニュアンスを与える効果がある。

2.2. N *de la F*

2.2.1. N が動詞派生または形容詞派生の名詞のとき

『小学館ロベール仏和大辞典』（1988）（以下、『小学館ロベール』）では、「*de* の前の名詞が動詞の名詞化したものであって、フランスがその主語または目的語の関係にある場合は〈*de la France*〉となる（p.1093）」と示されている。

我々のコーパスにおいても *N* が動詞派生の名詞であるとき、さらに形容詞派生の名詞の場合にも *de la F* の形式が用いられることが確認された。

－動詞派生の名詞

a) *la F* が対応する動詞の主語にあたる場合

(24) On ne peut pas expliquer que l'endettement *de la France* dépend de ces cinq dernières années. (Le Monde, le 04. 05. 2007)

b) *la F* が対応する動詞の目的補語にあたる場合

(25) La division politique et morale *de la France* pendant l'occupation allemande était cependant présente, [...].

(OZOUF, M. 2009, *Composition française : retour sur une enfance bretonne*)

－形容詞派生の名詞

(26) Il y a la pluie souvent, la misère des grêles, le fleuve qui inonde, mais il y a la beauté calme et ancienne *de la France*, [...].

(HAVET, M. 2005, *Journal 1919-1924*)

N が動詞派生や形容詞派生の名詞の場合、*France* は元々の動詞や形容詞による構文の構成素のひとつとなっている。1.2. で見たように、*France* が文の構成素として発話の場に導入される際には実体が想定できなければならない。それゆえ *N* が動詞派生または形容詞派生の名詞の場合にもその裏にある動詞や形容詞による構文が想起され、文の構成素のひとつである *France* が *de la F* の形式で用いられることになる。

2.2.2. *N* と *France* が部分・全体の関係にあるとき

『小学館ロベール』によれば、「*de* の前の名詞とフランスとが、部分⇔全体の関係である場合は *de la France* になる (p.1093)」という。実際我々のコーパスにおいてもそのことが確認できる。

(27) J'avais l'impression, après le trajet du train traversant à grande vitesse les paysages d'automne de la moitié *de la France*, [...].

(GARAT, A.-M. 2003, *Nous nous connaissons déjà*)

- (28) [...] *c'est l'été, c'est pendant ces années où je suis absent, c'est dans le Sud de la France.*
(LAGARCE, J.-L. 2000, *Juste la fin du monde*)

N と France が部分・全体の関係にあると解釈できるとき, France はフランスの国土という限定された土地を指示対象とし, N にはその限定された土地における方角や地域 (*le Midi, les provinces* など), 割合 (*la moitié, une grande partie* など) などを表す語が用いられる。部分を問題にするときは具体的な全体が前提となるために, *de la F* の形式が用いられる。

3. その他

3.1. 形容詞の補語として用いられるとき

前置詞 *de* が形容詞の補語を導く場合には常に *de la F* が用いられる。

- (29) *Les Veil avaient le même profil social et culturel que les Jacob ; des Juifs non religieux, profondément cultivés, amoureux de la France, [...].*
(VEIL, S. 2007, *Une vie*)

- (30) [...] *l'Angleterre n'était pas spécialement amie de la France.*
(GARAT, A.-M. 2008, *L'enfant des ténèbres*)

これは, 1.2. で見た前置詞 *de* が他動詞の間接目的補語を導く場合と同様に, 文の構成素のひとつとして発話の場に導入される要素は実体ある対象として捉えられる必要があるからである。

3.2. 最上級の補語として用いられるとき

前置詞 *de* が最上級または最上級に準じる表現の補語を導く場合には *de F* の形式が用いられる。

- (31) *Son siège est à Paris, rue de Lille, et c'est la plus grande banque de France.*
(WINOCK, M. 2003, *Jeanne et les siens*)
- (32) *Qui eût prévu que la première ville de France libérée serait Bayeux?*
(AUROY, B. 2008, *Jours de guerre : Ma vie sous l'Occupation*)

2.1.2. では N に de F が付与されることによって国を代表するものという意味価値が加わることがあることを見たが、最上級あるいは最上級に準じる表現の補語として de F が用いられる際にも同様に、「もっとも～なもの」に前置詞 de を介して「フランス」というラベルを貼り、それによって「フランス」を代表するものとして提示するわけである。

3.3. de を含む前置詞句に導かれるとき

コーパスを観察すると、France が de を含む前置詞句に導かれるときには、de la F となるようである⁽⁸⁾。

- (33) Celui-ci eut beau téléphoner vingt fois pendant notre conversation, alerter les journalistes sur ma «trahison» à l'égard *de la France*, [...] rien n'y fit.

(VEIL, S. 2007, *Une vie*)

- (34) L'appareil put voler jusqu'au-dessus *de la France*, [...].

(CHALANDON, S. 2009, *La Légende de nos pères*)

単独で用いられる意味内容の希薄な前置詞 de と異なり、たとえば上の例の“à l'égard de”や“au-dessus de”などはそれぞれ明確な意味を持つ。意味内容の濃い前置詞句は先行する要素と France とを具象的レベルで関係づけるため、France 自体も実体あるものとして捉えられる必要がある。そのために de la F の形式が用いられると考えられる。

ところで我々のコーパスによれば、前置詞句“hors de”が de F の形式で用いられている例が複数あった。この前置詞句は先行する要素に対して「フランスではない場所」「フランス以外の場所」という関係を示すのみである。そのため特に France の実体を想定する必要もなく、de F の形式が馴染みやすいのではないかと思われる。

- (35) Francis Jeanson, [...] et qui avait dû se réfugier hors *de France*, voulait continuer [...].

(MASPERO, F. 2002, *Les abeilles et la guêpe*)

4. France 以外の女性国名・母音国名の場合

ここまで France の場合のみを見てきたが、上の各構文、各用法においては他の女性国名・母音国名も France の場合と同様に定冠詞の有無の選択が行われるようである。ところが、France 以外の女性国名・母音国名が France と異なるふるまいをする場合がある。

たとえば「フランス史」は “l’histoire *de France*” と表されることが一般的であるが⁽⁹⁾、フランス以外の女性国名・母音国名を用いるときには、インフォーマントによれば、定冠詞を伴い、“l’histoire *de la Chine*”, “l’histoire *de l’Italie*” とする方が自然であるという。

同様に「フランス地図」“une carte *de France*” も他の女性国名・母音国名の場合には定冠詞を伴って “une carte *de la Chine*”, “une carte *de l’Italie*” と表す方が自然であるようだ。

女性国名・母音国名であっても、「自国」のことなのか「他国」のことなのかによってふるまいが異なるということである。これは「他国」の場合、国という実体をより意識しやすいためであろう⁽¹⁰⁾。

しかしながら “l’histoire *d’Italie*”, “une carte *de Chine*” などと表されることがあるのも事実である。これはいわゆる「模倣」によるものと考えられる。科目・学科としての「フランス史」“l’histoire *de France*” と同様に科目・学科として “l’histoire *de Chine*”, “l’histoire *d’Italie*” と提示されるのはおおいにあり得ることである。他にもたとえば「フランスの地図」「イタリアの地図」「中国の地図」と羅列するとき、上で述べたことに従えば「フランス」のみ無冠詞で提示すべきであろう。

(36) Nous avons une carte *de France, de l’Italie et de la Chine*.

ところがインフォーマントによれば、一方は無冠詞、もう一方は定冠詞付きというバランスの悪さゆえ、「フランス」の提示の仕方を「模倣」してすべて無冠詞で提示する⁽¹¹⁾こともあるという⁽¹²⁾。

(37) Nous avons une carte *de France, d'Italie et de Chine*.

5. おわりに

以上、前置詞 *de* に導かれる女性国名・母音国名における定冠詞の有無について、特に *France* の場合を中心に考察した。

前置詞 *de* は先行する語句と *France* との間になんらかの関係があることを示している。その際、*France* というラベルを貼って単に *France* との関係を示すだけの場合には *de F* を、そして *France* になんらかの属性が付与されたり、国土や機能、制度など国としての実体を想定する必要がある場合には定冠詞を伴った *de la F* が用いられる。

他の女性国名・母音国名も基本的に *France* と同様のふるまいをするが、*de F* が用いられやすい “*l’histoire de France*” や “*une carte de France*” などの場合に、他の女性国名・母音国名では定冠詞を伴うほうが自然であることもある (*l’histoire de l’Italie, une carte de la Chine*)。

前置詞 *de* に国名名詞が導かれるとき、子音始まりの国名男性単数名詞や国名複数名詞の場合には常に縮約がある。なぜ女性国名・母音国名の場合のみ定冠詞の有無の選択があるのか疑問の残るところではあるが、子音始まりの国名男性単数名詞や国名複数名詞が「フランス」にとって歴史的に新しい国であることや空間的に距離のある国であることと無関係ではないだろう。

注

- (1) たとえば不定詞を文の主語として導入する *de* (*De changer de poste ne lui aurait pas déplu.*) は主語を導入するという構文的役割を持つ以外、意味的価値は何もない。また “*l’admiration de Proust*” は「*Proust* が称賛していること」「*Proust* を称賛すること」のどちらの意味でも用いることができ、前置詞 *de* は単に “*l’admiration*” と “*Proust*” の間になんらかの関係があることを示すのみである。*Bartning* (1992) によれば前置詞 *de* の基本的機能は、N1 と N2 自体の語義からあるいは言語内外の情報から導かれる関係を示すこと (p.187) であり、そこから生ずる意味価値は二次的なものにすぎない (cf. *Melis* (2003))。

- (2) Cuba は女性国名であるが、国名が島の名に由来しており、無冠詞で用いられる。
- (3) Frantext から抽出した 2000 年以降の用例、独自に収集した新聞記事からの用例およびインフォーマントの協力を得て筆者が作成した例。
- (4) Grevisse (1988) §988 *Hist.* および *Dictionnaire étymologique du français* 参照。
- (5) インフォーマントによれば、(07) で de F が用いられるとするならば、「フランス」自体が奨学金の給付者であるという解釈は難しく、「フランス」は単なる「奨学金」の「出所」であり、たとえばどこか別の国の奨学金がフランスを経由して支払われるといった解釈にもなりえるという。
- (6) Englebert (1992) によれば、このタイプの de は前置詞 en や、さらには目的地や接近を表す vers や à にパラフレーズできるという。しかし、たとえば «la diligence de Lisieux» の “de Lisieux” が起点を表しているのか、目的地を表しているのか、“diligence” の存在場所を表しているのかは文脈によってのみ決まるとしている (pp.96-99)。
- (7) “la terre de France”, “le pays de France” は同格として扱われることがある。Englebert (1992) は、前置詞 de が地理的意味を持つ名詞同士または時を表す名詞同士を結びつける時に同格の意味が生じやすく、このタイプの de は comme にパラフレーズできると述べている (pp.36-39)。
- (8) 我々のコーパスでは、後で見る “hors de” を除いて、1 例のみ de F の用いられているものがあった。しかしながら我々のインフォーマント (3 名) によれば、これも de la F を用いたくなるとのことであった。

Grandie loin *de France*, dans ce pays de tous les mirages, elle menait la vie brillante [...].
(GARAT, A.-M. 2008, *L'enfant des ténèbres*)

- (9) 『小学館ロベール』によれば本の題名などでは “l’histoire de la France” もよく用いられるとのことである (p.1093)。しかしこれは本の題名ゆえに de la F が使われるということではなく、「フランス」を単なる場所ではなく、国というより明確な実体を持つ対象と捉えているかどうかということである。
- (10) 逆にイタリア語では「自国」のものである「イタリア史」を無冠詞で表し (*La storia d'Italia*), 「他国」のものである「フランス史」を冠詞を付与して表す (*La storia della Francia*) ようである (cf. Grégoire (2012), p.60)。
- (11) 名詞を羅列する際に冠詞が省略されやすいということは Grevisse (1988) でも指摘されている。冠詞を省略することによって文に勢いを与える効果があるという (§570, 7°)。
- (12) 我々のコーパスでは、同じ女性国名・母音国名間でも定冠詞の有無が混在する場合が見られた。

Qu'ils réclament des comptes [...] aux polices politiques *de France et d'Espagne*, de toute l'Europe hérissée de barbelés, et *de la Chine*, tant qu'à faire.

(GARAT, A.-M. 2010, *Pense à demain*)

参考文献

- BARTNING, I. (1992), “La préposition *de* et les interprétations possibles des syntagmes nominaux complexes. Essai d’approche cognitive”, *Lexique* 11, 163-191.
- ENGLEBERT, A. (1992), *Le «petit mot» DE*, Droz.
- GRÉGOIRE, M. (2012), *Grammaire progressive du français (perfectionnement)*, CLE International.
- GREVISSE, M. (1988), *Le bon usage, 12^e édition*, Duculot.
- Le Trésor de la Langue Française informatisé.*
- MELIS, L. (2003), *La préposition en français*, Ophrys.
- 『小学館ロベール仏和大辞典』(1988) 小学館.
- PICOCHE, J. (1991), *Dictionnaire étymologique du français, nouvelle édition*, Robert.

(文学部非常勤講師)